

SDGs と未来都市堺の果たす役割

研 修 会 記 録

(平成30年10月5日)

堺 市 議 会

堺市議会議員研修会
平成30年10月5日

研 修 会 記 録

講 師
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授
萩原 な つ 子 氏

堺 市 議 会

○午前10時1分開会

○山口議長 皆さん、おはようございます。定刻となりましたので、ただいまから堺市議会議員研修会を開会いたします。

本日は、本当に皆様お忙しいところ、議員研修会に多数御出席をいただきましてありがとうございます。

議員の皆様には御承知のように、本市議会は議会基本条例第18条において、議員の政策形成及び政策立案の能力向上のため、議員研修を充実強化すると規定しております。このことから、本日は、SDGs未来都市に選定された本市が今後どのような取り組みを行い、人口減少や超高齢化などの地域課題の解決のためにどのような提案をすべきかをテーマに、SDGsの掲げる17の目標について環境とジェンダーの視点から学ぶことを目的とし、きょう講師として環境社会学、男女共同参画、非営利活動論を専門分野とされ、内閣府男女共同参画推進連携会議議員や中央環境審議会委員等を歴任、現在は経済産業省産業構造審議会委員等を務めておられ、全国各地において多くの講演を行っておられます萩原なつ子様に御講演をお願いしましたところ、公私多忙にもかかわらず御快諾をいただきました。ありがとうございます。

つきましては、議員各位におかれましても最後まで御傾聴いただき、この全議員研修会が有意義なものとなりますようお願い申し上げまして、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。

それでは、着座にて進行させていただきます。

では続きまして、本日の研修会の講師であります萩原なつ子先生を御紹介いたします。

萩原教授はお茶の水女子大学大学院修士課程を修了、2000年には博士号を取得されました。また、公益財団法人トヨタ財団アソシエイト・プログラム・オフィサー、宮城県環境生活部次長、武蔵工業大学環境情報学部助教授を経て、立教大学社会学部教授、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授となられ、現在に至っておられます。

著書としては、「市民力による知の創造と発展」「ジェンダーで学ぶ文化人類学」などがございます。

本日は、「SDGsと未来都市堺の果たす役割」と題しまして御講演をいただきます。

それでは、萩原先生、よろしく願いいたします。

「SDG s と未来都市堺の果たす役割」

講師 立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科教授

萩原 なつ子

○萩原講師 改めまして、皆さんおはようございます。きょうはこのような会にお招きいただきまして本当にありがとうございます。

今、議長からいろいろ御紹介いただきましたけども、こんなにかたい紹介をされたのは、もしかしたら初めてです。山口典子さんとはもう25年以上のおつき合いですので、何かどんなことが飛び出してくるのかなと思ったら普通だったんで、やっぱり議長ともなると緊張感が違うのかなということ、私も何だかそれで緊張してまいりました。

きょうはSDG s と未来都市堺の果たす役割ということなんですが、29の都市が選ばれておりまして、私のほうも、その29全部チェックはしております。堺が選ばれているということは、非常に私自身とすると、日本のSDG sを進めていく上でとても大事な役割を果たしていくなというのを全体を通して見てもよくわかります。非常に大都市であるということ、そこでのSDG sの取り組みがきちっとバックキャストで数値目標を達成していくと、ほかへの波及効果が非常に大きいだろうということです。非常に文化的な都市でもありますし、なおそれ以上にセーフシティとして、今度カナダでも会議が開かれますけれども、セーフシティとして取り組み、日本で唯一堺がやってるということもありまして、後ほどお話しさせていただきますけれども、国がSDG sを進めていくときに一番最初にトップに持ってきているのが、やはりジェンダーの問題です。女性の活躍、それから子ども、女性たちのSDG sの担い手としての役割、これをトップに持ってきているということから、それをもう既に堺市は随分前からやっておられるということもありまして、そういった意味でも非常に重要な役割を果たしていくだろうというふうに思っております。

いろいろ資料を御用意させていただきました。きのう、どんと宅急便で送らせていただいています。ここ誰も来てないので、資料の確認をさせていただきます。

まず一番最初にあるのが、『私たちが目指す世界、子どものための「持続可能な開発目標（SDG s）」』、これは実はラテンアメリカのほうで子ども向けにつくられた開発目標、17の目標なんですね。これを日本のNGOの方たち、SDG sを積極的に進めるNGOの方たち、これは後ろにその方たちの団体のロゴがあります。この方たちが環境省のほうのお金をもらって翻訳をしたものです。

実は今SDG sにとってみると、未来都市ということですから、未来の担い手ですね、子どもと一緒にやっていくというのは、これはもう外せません。おじさんやおばさんが一生懸命やっても10年、20年後に存命しているかということ、そういうわけではないので、今本

当に小さい子供たちがこのSDGsの達成のために一緒になって考えていかなきゃいけないということもありまして、これが翻訳されて、いろんなところで子どもたちのいろんな教育現場においても使われるようになっていきます。

先日も豊島区で子どものための支援ということの中でSDGsを取り上げまして、これをみんなで勉強会させていただきました。なので、これ非常にわかりやすく書かれていますので、私たちが読んでも、何かそういうことだよ、貧困ってこういうことだよ、質の高い教育というのを子どもの目線から見たときはこうだねということもわかりますので、参考にいただければというふうに思います。

それから、「そうだったのか。SDGs」、これ販売もしてるんですけども、最初の序章のところですね、基本解説、これはSDGsの市民社会ネットワーク、CSOですね、SDGsを国としてしっかりと進めていこうということで、NPO、それから行政、企業、地域の町内会、自治会、さまざまところが連携・協働しながらSDGsを進めていこうということで、しっかりとSDGsって何なのかということの基本解説したものです。これ大変よく売れているんですが、最初の1章、2章の部分をお配りしております。これも参考にいただければと思います。

続きまして、エルコレーダー、エルコレーダーって書いてあるものがあるんですが、これは公益社団法人環境生活文化機構というところがあるんですが、ここの私は立ち上げのときにかかわっております、15年ほど理事を務めておりました。これは環境省がつくった環境、生活、文化、まさに堺市にぴったりなんですけども、環境、生活、文化、この3つを中心に置いた社団法人なんですけれども、そこで出しているエルコレーダーの最新版です。ちょうどこの星野智子さん、「SDGs時代における環境保全活動と市民社会」ということで寄稿してくださってましたので、出たてほやほやなんですけども、これもごらんいただくと、きょうこれからお話ししますけども、SDGsというものが突然やってきたわけではないんですね。30年、40年をかけて、もっと50年、もっと言うとならば後でお話ししますが、100年以上の時間をかけてSDGsというものは、やっとならば多くの方たちにとって重要な課題であるということが認識され、そして国を挙げ、そして世界の共通言語として、この持続可能な開発を進めていくんだということになっていった。その簡単なレビューもこの中に書かれています。

そして最後に、このSDGsの目標17に書かれていますパートナーシップですね、連携・協働してみんなでこの問題を解決していくんだということで、このパートナーシップです。環境パートナーシップ会議と書いてありますが、実は環境パートナーシップ会議があるところは環境パートナーシップオフィスというところがあるんですが、御存じの方いらっしゃいますでしょうか。国連大学の下にあるんですけども、行ったことのある方いらっしゃいますか。ぜひ東京に行きましたら、ありますか、ないですか、国連大学の下に環境パートナーシ

ップオフィスというのがございます。これもリオサミットの後につくったんです、実は。1992年なんです。そのときにも、つくるときの委員として、これからはやっぱりパートナーシップであるということで、国連とそれから文部科学省、当時は環境庁が連携・協働いたしましてつくったのが環境パートナーシッププラザです。そこに行きますと、さまざまな環境関係のまさにSDGsに関する資料であるとか、シンポジウムであるとか、講座が開催されていますので、ぜひ一度行ってみていただければというふうに思います。

そして最後に、「特集 国内外の社会動向とGEOCの活動」、これも環境パートナーシッププラザというか、オフィスのところなんですけども、これに沿ってちょっと進めていきたいなというふうに思います。

歴史的な背景をちょっと追っていききたいというふうに思うんですが、その前に、私とSDGsということで、私がどういう人間なのか、なぜ私がこんなSDGsなんていうことをやるようになったのか、あるいはもっと言うとなぜ環境と開発なのかということのおさらいとか、おさらいじゃなくて、皆さんに御紹介をさせていただきたいというふうに思います。

まず、私は山梨県の石和町というところの出身です。石和町、行ったことのある方いらっしゃいますか。ありがとうございます。石和温泉、そうです石和温泉です。突然ブドウ畑に温泉が噴き出しました。そこから開発がもう猛然と進みまして、のんびりしてたんですけどね、だんだん道もどンドン道路になっていってバイパスはできるし、道草食いながらなっていた道がどンドン開発されてしまって、子どもたちにとってみると、とっても住みにくいまちになっていってしまいました。

私は1900、年ばれてないですね、1975年に上京ですから、すぐわかっちゃいますが、1956年生まれです。さる年です。さる年の方いらっしゃいませんか。残念、捕獲に失敗をしてしまいました。全国組織持ってるので。1956年ってとても重要な年なんですけども、どんな意味で重要でしょうか。しかも私が生まれたのが7月18日で、その生まれた日にあるものが出されてるんです、白書が。質問しちゃっていいですか。（「わからないです」と呼ぶ者あり）

ありがとうございます。わからないというのは、わからないと言ったほうがいいですもんね。経済白書です。経済白書が発表されて、そこに何て書いてあったかということ、もはや戦後は終わったって書いてある。もはや戦後は終わったという1956年に私生まれてまして、その高度経済成長とともに生きてきております。その間に、やはり高度経済成長といいますと、いろんな意味で自然環境が破壊されていって、経済中心です、開発、開発。開発も人々の生活というよりも、もっともっと経済を発展させて成長していくんだという方向に行っていたので、山梨県の石和町も先ほど申し上げましたように本当に経済中心、人は取り残されていく状況になりました。

一番私の印象に残ってるのは、道が道路に変わるということで、バイパスができたときに、

その開通式というのがありました。開通式のときにテープが切って落とされて車がばあっと走っていった瞬間に、私の友人のお母さんが自転車に乗っていて、ひかれて亡くなってしまいました。これが私にとってみると物すごい、そのときには何て言ったらいいんですかね、どう表現していいかわからなかったです。

後に道が道路が変わるとき、これ1972年に、歩行者天国というのを覚えていらっしゃると思うんですけども、歩行者天国というのがスタンフォード大学の学生からスタートいたしました。ダイ・インといって道路に寝転んでしまう。それはどういう運動だったかという、道を人に取り戻すという運動だったんです。車ではなくて、もっと人や生き物を大事にしていこう、そういう意味で歩行者天国って始まったんです。日本に導入されてきたときは、その理念が導入されません。日本の場合は、その形だけが導入されてしまうんです。その歩行者天国の本来の意味というのは、人、命をもう一度見直していこう、そういう運動でした。日本でも銀座とか、いろんなところで歩行者天国があったと思うんですけども、それ今ないですね。なぜかという、渋滞を招くから、車の渋滞を招くから。ちょっとやっぱり歩行者天国の意味合い、理念が入ってきてない。やっぱりこの理念をしっかりと理解していくということが大事なんじゃないかなと思います。

その後、私自身はそういう経験から、やっぱり自然というもの、自然環境と私たちの生活というか、生き物と私たちの生活というものをすごく考えるようになりました。そして1975年に東京に出ます、大学に。そこでとんでもないことになったのは、水が飲めなかったということです。余りにも塩素臭くて。今は飲めますけども、当時は飲めなかったですが、これはプールの水なんだろうかというぐらい、そういう非常に臭くて、こんなに水を汚してしまっただけ私たちがいいのだろうかというふうに思いました。

もう一つは、私は山梨県、桃という、今、岡山ってなるかもしれませんが、やはり山梨県も桃は有名なんです、八百屋さんに行ったときに桃を買おうとしたんです。そしたら、お手を触れたらお買い上げくださいって書いてあったんです。指紋がつく。やわらかいんですよ、桃って。でも、私にとってみると桃というのはかたいんです。かたくないと桃じゃないんです。それはやっぱり文化だと思います。お買い求めくださいと言われちゃったんで、買えないって。つまり、後ろを見ないと甘いかわからないんで、これもその経験値だと思うんですが、そういう食べ物とか水とか、自分が暮らしていた山梨県というのがいかに恵まれていたところなんだということがわかりました。

ただ東京に出てきてしまったときに、じゃあこの東京でどういったことが可能なんだろうかということを知り始めたときに、ちょうどその農業がどんどん衰退していつてしまう、そういう時期でした。そこから第1次産業の大切さみたいなものを学びたいというふうに思っていて、実はその当時から有機農業運動というのが始まってまして、そこにかかわるようにもなりました。食から環境問題に入っていきます。

その食から環境問題に入ってしまったときに、人々とそれから生き物とか、そういったものが共存共生していくためには、どういう考え方が大事なんだろうかというふうに思っていたときに出会ったのが、このエレン・スワローという人です。エレン・リチャーズ・スワロー、これほとんどの方が知らないと思います。レイチェル・カーソンという名前は聞いたことがあるかもしれません。

その後いろんなことがあったんですけども、私が環境の問題に入っていくって修士論文で書いたのは、「それ行け！YABOー子どもとエコロジー」です。やっぱり必ず子どもなんです。未来世代、未来に生きる子どもたちに対して、私たちはしっかりと自然やさまざまな環境、伝統文化も含めて伝えていかなきゃいけないので、常に私の関心は子どもです。このエコロジーという言葉も1989年ですね、エコロジー元年、環境元年と言われましたが、そのときあたりに出てきたんですけども、私とすると、もう随分前からちょっとエコロジーという言葉には関心があって勉強を進めていきました。これはリサイクル文化社というところを出した本です。修士論文を本にしたものなんですけど、1990年に出しています。早過ぎたというふうに言われております。

この本に寄せてということで、私の師匠である原ひろ子さん、文化人類学者ですが、このように書いてくださっています。

私たちの子どもたち、そのまた子どもたち、そしてその孫たちやひ孫たちの生きる時代に地球の表面はどのような状態になっているのでしょうか。海は、川は、森林は、野原は、砂漠は、土壌は、地球を取り囲む大気は、そしてまちは。その問いは、つまるところ未来の子どもたちのために今私は何ができるのかということになっています、というのが私の本に書いてくださった文章です。これ、そのまま今生きてます。1990年のときに書いてくださった言葉ですけども、これは今でもそのとおりで、SDGsがめざす社会もこれだと思いません。未来世代に対して私たちはちゃんと残していけるのかということですね。

そういうときに出会ったのが、エコロジーを創始した女性と言われているエレン・リチャーズ・スワローという方です。この方は、実は環境教育とか、消費者教育とか、家政学の母と言われている人なんです。1842年から1911年です。およそ100年以上前の方です。その方が実は今ここでSDGsって私たちが言ってることをもう既に言っていたらしゃるんです。MITってマサチューセッツ工科大学ってありますが、ボストンの、そこに女性として初めて入学を許可された方です。アメリカの最初の化学者マダム・キュリーが尊敬してやまなかった化学者です。マダム・キュリーがノーベル賞をとった後にも、このエレン・リチャーズ・スワローのところに行ってます。

彼女は、実は1892年の11月30日にエコロジーという言葉の命名式をしてるんです。エコロジーという命名式。そのときに、このように言ってます。人々が環境と調和して生きるための知識を身につけるための科学。自然環境と共生し得る生活、経済社会の形成をめざ

すための学際的科学、社会運動として、このエコロジーというものをつくり出しています。

しかし、当時やはり学問の世界も、今でもまだまだそうなんですけれども、男性中心の社会でしたので、女性が学問をつくるとは何事だということで、エコロジーという命名式もしたんですが、残念ながら学問としては成立することができませんでした。

そこで彼女は、なぜここで家政学の母と言われてるかということ、アメリカ家政学会をつくるんです。じゃあ、なぜ家政学がここから来たのか。エコロジーの語源なんですけども、エコロジーの語源は何だと思いますか。オイコスというギリシャ語です。全ての生命が宿るところ、地球を意味していきます。アリストテレスが言ってるんですね。そこからスタートします。オイコス。

そのオイコスというギリシャ語の言葉から派生した言葉が2つあります。1つはエコロジーです。もう一つは何でしょうか。何かしんとしてます。聞きに行っちゃいますけど、どうでしょうか。来ました、来ました、行きますよ。（「わかりません」と呼ぶ者あり）

ヒント、みんなが本当大好きなんですよね。エコロジーと、はい。（「アイコス」と呼ぶ者あり）

アイコス、ぼけてくれますね、やっぱり。（「わかりません」と呼ぶ者あり）

どうですか。（「わからないです」と呼ぶ者あり）

エコロジーとエコノミーです。オイコスから派生した言葉がエコロジーとエコノミーなんです。ですから、環境か経済かではないんですね。環境も経済もなんです。だから、SDGsもそれを言ってると思います。経済を全く否定することはできません。だけど、このオイコスという言葉には、そのバランスということが書かれてるんですね。

そこでエレン・リチャーズ・スワローは、エコロジーという言葉をちょっと諦めまして、エコノミーをつくって、ホーム・エコノミクスをつくるんです。家政学です。

今そのホーム・エコノミクスは今、ヒューマン・エコロジーという言葉に変わってきておりますけども、日本でも家政学ではなくて生活科学科、人間科学部というふうになってますが、そのオイコスという原点に戻ったときには、環境も経済もまさに今のSDGsなんですね。だから原点に戻ってるだけだというふうに思っていたらというふうに思います。

私は、このエレン・リチャーズ・スワローの研究を続けておりまして、いまだにやってるんですが、ボストンのMITに行きますと、エレン・リチャーズ・スワローのレリーフがかかっています。MITに入った方は必ずエレン・リチャーズ・スワローにあやかろうということで、鼻をさわることになってます。もしボストンに行かれることがありましたら、MITに行ってエレン・リチャーズ・スワローのレリーフの鼻をさわってみてください。もうびかぴかです。私もさわってきました。

このときにエレン・スワローは、人間が全地球の支配者であるという考え方に私たちはすっかりなじんでしまっている。文明が高度になればなるほど良識は衰退し、日常生活に応用

される科学も減少していく。これからはエコロジーを私たちの日常科学にしましょう。それを全ての応用科学のうち健康で幸福な生活がその上に打ち立てられるべき諸原理を教える最も価値ある科学にしようというって、エコロジーを、ホーム・エコノミクスをつくってるんです。

なので、健康で幸福な生活、これもSDGsの中に書かれているものです。堺もそれをやろうとしてますよね。家政学。

もう一つ、アメリカを、そして世界を変えた本、沈黙の春というサイレント・スプリングという本、御存じの方いらっしゃいますか。

ありがとうございます。沈黙の春、これはアメリカ、そして世界を変えた本とされています。レイチェル・カーソンですね。ぜひエレン・リチャーズ・スワローとレイチェル・カーソン、SDGsにつながる基礎をつくった2人の女性として覚えていただきたいと思いますが、レイチェル・カーソンの沈黙の春というのは1962年に出ています。日本でもすぐに翻訳はされてますが、自然は沈黙した。薄気味悪い。鳥たちはどこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は空っぽだった。ああ、鳥がいたと思っても死にかけていた。ぶるぶる体を震わせ飛ぶこともできなかった。春が来たが、沈黙の春だったというふうに始まるんです。

レイチェル・カーソン自身も非常にすぐれたサイエンティストだったんですけれども、海の問題とか、ウッズホール海洋研究所でさまざまな研究をしていましたが、あるときに自分の友人からこういう、鳥がもういない、みんな死んでいる、湖の魚も死んでいる、一体何が起きたのかといったときに、空中散布です、農薬の。空中散布が行われていて、アメリカで、それでそれによって人もそれから生き物も亡くなって、まさに生物多様性を考える基本になりました、これが。

この沈黙の春がニューヨーカーという雑誌に連載をされていたときに注目をした方がいらっしゃいます。1962年ですので、当時のアメリカの大統領は誰だったのでしょうか。皆さん、お若い方が多いんですね。ケネディ大統領です。そのケネディ大統領よりも、もっと早くこのレイチェル・カーソンの沈黙の春の重要性を認識した人がいました。誰でしょうか。もうぱっと聞いてしまいます。よろしいですか。ケネディ大統領の、ケネディ大統領といえは横にいるのは、ジャクリーヌ・ケネディです。いわゆるファーストレディと言われたジャクリーヌ・ケネディです。

ジャクリーヌ・ケネディは大変すぐれたジャーナリストでした。ジャクリーヌ・ケネディは、このレイチェル・カーソンの沈黙の春に物すごい敏感に反応したわけです。これは大変なことになってしまうと。生物というだけじゃなくて、私たち人間も食物連鎖の頂点にいるので。それで彼女は大統領府に呼ぶんです、レイチェル・カーソンを。なぜそれがわかったかという、レイチェル・カーソンとある方の往復書簡の中に書いてあるのをちょっと発見

したんですね。ジャクリーヌに呼ばれてるのといって、そこできょう私がお話ししているように、今アメリカ中この農薬の問題で土壌が汚染されて、そして鳥も鳴かなくなって大変なことになってるって話をするんです。それに対してジャクリーヌは、これは大変だということで、恐らくケネディ大統領に対して、ちょっとちょっとあなた大変よと言ったんじゃないかと思います。

それで、ケネディ大統領は全米に農薬の調査、農薬がどのように影響を与えているのかという調査を命じるんです。そこから科学諮問委員会の設置と農薬についての調査というのを命じまして、1963年に殺虫剤の使い方報告書というのが出るんです。それによって有機塩素系殺虫剤が禁止されたりとか、いわゆるDDTですね、DDT、私たちなんか頭からかぶっちゃって、私はかぶってませんよ、私はかぶってませんけれど、大みそかのときのお掃除のときに必ず何か畳の下にDDTをまいてたような気がします。それだから私たちもかぶっちゃってるんですよ。

その後、パラチオンとかマラソンもこれを禁止していったんです。それによって米環境保護庁ができたんです。ですので、レイチェル・カーソンがいなくて、そしてジャクリーヌも余り無視して、そしてケネディも見向きもしなかったら、SDGsがこの段階で出てきたかどうか、ちょっとわかりません。それくらいインパクトを与えたのが沈黙の春というものです。

そしてこのケネディ大統領の決断というのが世界を変えていくわけです。環境の問題をしっかりと私たちはやっていかなくちやいけない。経済、経済、そして開発、開発、自然も人も幸せにならないような開発をしていってはいけないということがここで出てきます。日本はその後に、アメリカがくしゅんとくしゃみをしますと必ず風邪を引きますので、日本でも環境庁がその後、誕生するということになります。まだ盲腸のような環境庁でございます。

2人の科学者の思いとして、レイチェル・カーソンとそれからエレン・リチャーズ・スワローの思いをまとめますと、自然を支配するという科学と技術の発展がいかに環境を破壊し、ひいては人類の危機につながるかを警告した。

この科学と技術のところなんですけど、後で申し上げますが、SDGsの中で日本国政府が8つの柱を出してるんですが、その中でも重要な3つの柱の1つにSociety 5.0というのがあると思います。これ、科学技術のイノベーションです。当然のことながら、堺市の未来都市のほうの計画書の中にも、技術、科学技術の発展によって生業というか、それつくっていくんだというふうなことも書かれておりますが、この科学技術を社会にインストールする、実装するという言い方をいたしますけれども、このインストールするときはどういう影響があるのか、社会的なインパクト、それから人々や社会に対するインパクト。それともう一つは生物に対するインパクトです。生き物に対するインパクトはどうなのか、そういうことを考えていかなければいけないというのを2人は言っている。だから、科学と技術

がなしということじゃなくて、科学と技術の発展と、そしてそれが社会に実装され、インストールされていくときにどういう問題があるか、これを科学技術と社会の相互作用といえます。これはJSTと、科学技術振興機構のほうで15年ぐらい前からもうやりました、私も10年ほどかかわっております。そういう思想が必要になってきます。

それから、人間の自然に対するおごり、傲慢さを憂い、環境と調和し得る生き方を提唱、これがまさに環境教育あるいはESD、堺市もESD、環境教育、持続可能な開発教育を積極的に進めておられますけども、ここにつながってきます。そして女性に対する科学教育の重要性を主張。これ、リケジョというふうによく言われておりますけども、環境の問題というのは、実は化学的な知識が非常に重要になってまいります。

例えばいろんな食品添加物なんかを見ても、読めるんですけど、読めますが、それが一体何なのかというのがわからない。私たちはリテラシー、識字というのは、ただ読めるだけではだめだと言ってます。読んで、それがどういうものなのかをわかるということですね、理解をしていく。これが識字、リテラシーなので、その部分をやるためには、やっぱり教育というものが必要になってまいります。教育ですね。

3つの構成の提唱です。3つの構成というのはどういうことかということ、種の間、種の間です。種の間というのは人です。人というのを片仮名で書いたときには生物ですね、生き物としての人。人とほかの生物、生き物との構成です。これが生物多様性につながっていきます。生物多様性の問題ですね。

そしてもう一つが世代内の構成です。これはどういうことかということ、先進国と開発途上国の間の格差あるいは国内でいうと、いわゆるすごく発展している都市とそうでない都市と。後でちょっと申し上げますが、消滅可能性都市なんていうことが言われてるところの世代内、自分たちの中での格差。

それからもう一つが、何度も申し上げているように世代間の格差です。今の世代と未来世代との間の格差。この構成を考えていかなきゃいけないだろう。自分たちさえよければという考えではないですよというのが、ここで言っている。これがSDGsにつながっていくわけです。

そして豊かさの裏側ということで、環境破壊型ライフスタイル、大量生産・大量消費・大量廃棄、エコロジカルライフスタイルを国連が70年代から言っていると。選択すべき生活様式は簡素な生活志向であるということから、例えば目標の12はまさにここにあります。目標の12。SDGsで重要な目標の中に目標12、消費と生産のところがあります。これをここで言っております。こんな流れの中ですね。

原発事故はちょっと省きますが、SDGsまでの道のりということで、歴史的な一番根本のところを今、エレン・リチャーズ・スワローとレイチェル・カーソンのお2人の女性の科学者としてちょっとお話をさせていただきましたが、その後にあるのが皆さんのお手元にあ

ります「国内外の社会動向とGEOCの活動」というのを、ちょっとお手元に見ていただければと思いますが、細かい字で申しわけないんですけど、私も全然読めないみたいな感じですが、まず今ちょっと申し上げました1962年の沈黙の春、これがやっぱり世界を変えたことは間違いないです。

そして1972年、成長の限界という本ですね、ローマ・クラブです。私もこれを高校生のときに読みまして、これは大変だ、人口はどんどんふえてくんだけど食糧生産が追いつかないという成長の限界、ローマ・クラブですね、ローマ・クラブ。

それから、このときにストックホルム会議、国連人間環境会議、世界で初めての環境と開発に関する会議がスウェーデンのストックホルムで開かれました。このときに行ったのが宇井純さんであつたりとか、水俣病の患者の方が行きました。そして公害のすごさというか、それを訴えます。ですので、水俣という言葉が世界中に広がっていきます。水俣は水俣のまま広がっていきます。やはり私たちが経済開発というだけだと人々の命にまでかかわってくる、健康被害にまでつながっていくというのをここで世界に発表したわけです。

そして1986年にチェルノブイリの原発事故が起こります。その前にスリーマイル島の事故とかいろいろあるんですが、このチェルノブイリの原発の事故の後に、じゃあ原子力発電所はどうなんだという議論がぱっと巻き起こっていくわけですよね。日本では1950年代に原子力発電所を設置するということになったんですが、その話を言うと長くなってしまふので、こういうものがありました。

そして1987年に我ら共通の未来、これブルントラントさんです。ブルントラントさんってどこでしたっけ、デンマークでなくてノルウェーでしたっけ、ノルウェーの女性の首相ですね。ブルントラントさんたちがつくったので、ここで初めて持続可能な開発という概念がしっかりと世界に向けて発表されたんです。このSDGsのもととなる持続可能な開発、その考え方そのものは前からありますが、概念がしっかりと整理をされて世界に向けて発信されたのが、この我ら共通の未来、1987年です。この中には、もしかしたらまだ生まれてない方もいらっしゃるんじゃないかと思うんですけども、1987年ですね。

そして、その後に92年の国連環境開発会議が進められるんですが、このストックホルム会議から20年後の1992年にリオでサミットが行われるわけです。ここにはたくさんの日本人が行きました。私は行ってません。行ってないというのは、その前の年の1991年、これは多くの資料の中にありません。例えばこの皆さんのお手元の中にも、91年の話は実は出ていないんですね。

これは地球のための世界女性会議、これ健康な地球のためのと載ってるんですが、健康な地球のための世界女性会議というのが1991年に開かれています。マイアミです。そのときに日本人として日本から行っていたのは、恐らく四、五名だったと思います。私はそこで堂本暁子さんと出会います。

私はカナダの環境と女性という雑誌を出してる団体から、この会議は非常に重要な会議だから行けという指令が飛んできたわけです。そこで、当時小学校2年だった娘を連れて、マイアミ、もしかしたらディズニーワールドに行けるかもしれないとかってだましたわけではないんですが、連れてマイアミ会議に行きました。そこには1,500人の人が集っていました。世界中から集ってました。ここでつくられたのが女性のためのアクション・アジェンダ21です。それをリオサミットの事務局長のストロングさんに渡すということをやりました。

このマイアミ会議というのはなぜ重要なのかというと、さまざまな世界中の環境の問題とか、開発の問題に発言だったり行動してた方たちがいらしてたんです。有名なのはワングリ・マータイさんです。もったいないを世界共通語にとった方です。ワングリ・マータイさんも来られておられました。

このときに私自身が思ったのは、いろんなところに子どもたちがたくさんいたということです。例えば受付です。受付に子どもたちがいました。後ろでパソコンで入力してるのは子どもたちです。歌ったり、いろんなことをしてる。そして写真班も子どもたちで、だからうちの娘にもカメラ持たせて、君たちがこれからの時代を担っていくんだということで、子どもがかなり一緒にやっていたというのが印象的でした。

この女性のアクション・アジェンダ21があったので、実はリオサミットの採択したアジェンダ21の第24章、女性の役割というものが入りました。

なぜ91年をやったかということ、リオサミットで策定しようとしていたアジェンダ21に実は全く女性の文字が出てこなかったんです。女性の女の字も出てこない。女性は対象としてしか出てこなかった。だけど違うだろうと、担い手だろうと。それこそSDGsの目標5にあるように、担い手として重要なんだということをしっかりやっつけていかなきゃいけない。それでロビー活動としてマイアミ会議が開かれたわけです。このマイアミ会議を見ていた、一緒に参加していた堂本暁子さんが日本に戻られてきて、GENKIという団体をつくりまして、日本の環境問題をやっていた女性たちを束ねまして、リオサミットに送り込むということをやりました。それでそこから日本でも環境とジェンダー、そういったものが社会的にインパクトを持って、その後のさまざまなNGO会議にも大きな力を持っていた。その意味で、これは非常に重要な会議だった。

そして92年にリオサミットがあつて、その後2012年、20年後に、このリオ+20が開かれたわけです。

このときに、MDGsというのが後でちょっと出てくるんですが、ミレニアム開発目標、2000年に、これをMDGsというのがありますが、なかなかそれが達成できていないということから危機感を持ちまして、2015年の持続可能な開発サミット、SDGsの採択につながっていきます。MDGs、ミレニアム開発目標、8つの目標。

しかし、それはあくまでも開発途上国のためのものだったんです。だけど、どうも違うぞと。この問題というのは開発途上国だけの問題ではない。私は開発途上国というと、JICAの仕事もしていましたので、ケニア、ウガンダとかコスタリカとか、それから東南アジア、いろんなところを回っておりましたけども、日本の状況を見てもそんなに変わらないというか、日本もまだおくれる部分たくさんあるよねと。例えば女性の地位ということかというと、もうすぐダボス会議が開かれますけれども、昨年114位です。ことし一体何位になるのか、非常に気になる場所です。このマータイさんですね、マータイさんが日本にやってきて、もったいないということ言ってるわけです。

そういう中で、持続可能な目標17、これが世界共通言語にやっとなりましたとこです。それまでのリオサミットとか、アジェンダ21とか、心ある人だけ。心あるというか、関心のある方たちにとってみると非常に重要なポイントだったんですけれども、そうでない場合には、ほとんど余り、何ですかという状況です。もっと言うと、アジェンダ21の第24章になぜ女性の項目が入ったのかということ理解できなかった環境省の方たちもいらして、私はそこで講義をした覚えがあります。だって担い手として、人ですよって、対象じゃないですよって。担い手として男、女というよりも、人としてこの問題はやっていかなきゃいけないですよと話した覚えがあります。この17、世界共通言語としてSDGsがスタートするわけです。

じゃあ、なぜSDGsという、MDGs、開発途上国だけの問題じゃなくて、世界全体の問題だよねとなったのはなぜなのかというと、やっぱり世界はもう持続不可能になっているということ共通認識せざるを得なくなってしまったということだと思います。

貧困、飢餓、人口爆発、日本は人口は少なくなってますが、異常気象、もうまた地震がありました、北海道で。それからこの3週連続の台風、もう秋がなくなるんじゃないかと思えますぐらい、ちょっとおかしいです、本当に。私も環境社会学をやっているんで、いろんなところというと、もうこれ異常じゃなくて、異常が普通になってきてしまった。資源枯渇、森林の減少、海洋汚染。

特に今、この海洋汚染が非常に注目されてます。マイクロプラスチックですね。イギリスは2020年までに恐らく全部のプラスチックをやめていくという方向になってます。それからEUもそうですね。となりますと、日本はこの海洋汚染のマイクロプラスチックに関しては、実は署名をしておきませんので、日本の製品が販売できなくなる可能性があります。やっぱり国際的なレベルのところを見て、今、日本は何をしなきゃいけないのか、あるいは何をしなきゃいけないのかということを考える必要が、もうこのSDGsでも出てきてるということです。

マイクロプラスチックに関していいますと、ストローですね、ストローをやめましょうということがマクドナルド、こちらではマックですか、マクドと、それからスタバとかそういう

ったところが率先して、もう紙にしていくと。私の世代は、ストローといったら本当のストローですから、麦わら、あれでいいんじゃないっていうふうに思うんですが、学生にすると、プラスチックのストローがなくなるの困ると言うので、なぜ困ると聞くと、えっという。だから知らないということですよ。だから昔は本当にストローだったんだよと言うと、未知との遭遇ですと言われますが、そういうプラスチックをなくならせていく。もう本当に海洋汚染のことを考えると、プラスチックの量のほうが魚よりも多いのではないかということが言われています。さかなクンもすごい憂いておりました。

例えばスクラブっていう洗剤ありますよね、顔、スクラブ。あれ実はプラスチックだったんです。それに対して眼科からクレームが入ったんです。みんなあのプラスチックで顔を洗ってたんで、ここにみんな目に入っちゃった。これ、健康被害ですね。それで、つくってるメーカーに対して一体何を考えてるんだということで、すぐにやめたのが資生堂さんと、それから花王さんですかね。今あのスクラブ、プラスチックじゃないです。

でも、さまざまなプラスチックが使われているので、どうするのか。

ペットボトルもそうなんですけど、ペットボトル、1982年なんですよ。私なぜそんなことを覚えているかというと、大学にもう1回戻ったときに、ペットボトルが環境に及ぼす影響というのでレポートを書いたことがあるんです。ペットボトル協会にも行きました。ペットボトル協会としては、これ、ごみ問題としてどのようにお考えですかと言ったら、こんなものごみになりませんよって一蹴されてしまいました。大変なごみ問題になっていると思います。

で、格差ですね。これ人権侵害、差別、ここのところはやっぱり世界共通の本当に重要なポイントで、これがあるからこそ、異常気象が起きたときにも差別の構造として一番被害をこうむってしまうのは貧困層という形になってしまうと。テロ、紛争、自然災害、持続不可能な生産消費活動、未来世代に引き継げない、これが3つの構成のうちの世代間構成です。次の世代に引き継げないです、このままでは。なので、これをきちっと私たちは次の世代までつなげていけるようにしていかなきゃいけないというのがSDGsです。

今の世代だけがいいというわけではない。それはもう十分享受したでしょうと言われてるんです。もうだから享受したんだから、次の世代に残すためにフットプリントとかいろいろ出てきますが、皆さんが使える資源はこれだけです、もう水もこれしか使えませんよということをオランダなんかの団体は強調するわけですね、こういう状況になっています。

私たちは次世代に地球を引き継げない。具体的な問題とすると、高齢化と人口増、アジアの高齢化、それからサバンナ以南のアフリカの人口増20億、世界の若者の半分はアフリカ人になるというふうに言われています。TICADが日本でまたやりますけど、アフリカという国に対しては非常に今注目をされています。

日本の現状はどうかというと、消滅可能性都市、後でちょっと豊島区の取り組みを御紹介

させていただきます。少子高齢化、高齢者の高齢化、出生率の低下、子ども人口の減少、もううちの娘が生まれた1982年からずっと子どもの人口は減ってるわけですよ。格差と貧困というと、貧困の拡大、ジェンダー問題、マイノリティーの差別、LGBTも含めて、文化的格差。日本は貧困と関係ないじゃないかとおっしゃる。いや、貧困化は進んでいます。相対的貧困化、非常に進んでいるし、子どもたちの貧困も進んでいるし、じゃあ子どもの貧困は誰の貧困かということ、親の貧困になります。親の貧困、特にひとり親、女性の貧困、女性の経済格差、つまり賃金が男性の6割、7割。それから、ひとり家庭は就業率も高いけど貧困率も高いという賃金格差が非常にそこに影響を及ぼしてしまう。

大量生産・大量消費・大量廃棄、地球の現状を維持できる生産量の1.5倍の消費を私たちはしてしまっている。ということは、成長の限界、1972年に成長の限界というローマ・クラブが出したものがそのまま当てはまってしまってますよという。日本はフードロスということを見ると、もう1,800万トン。どうでしょうか、堺のフードロスは。

私、今、墨田区のこういう環境系の座長をしてるんですが、墨田区は今ちょっとにぎわってますが、お相撲さんがいる区ということで、こういうキャッチフレーズをつくってます。決まり手は食べ切りです。決まり手は食べ切りですということで、とにかく何でもちゃんこにしたいということで、何でもちゃんこという運動を展開してまして、レストランなんかにも、とにかく食べ切っていきましょうという、人々の、来る人たちに訴えるというふうな活動をしています。もうお題目唱えてもしょうがないので、来る方一人一人、住民一人一人が一緒になってやっていかなきゃいけないよということを啓発ですね、これをしていくというふうにしております。

世界観の修練ということですけど、もう改革じゃ間に合わないよと言ってます。リフォームではなくてトランスフォーメーション、変革です。だから、このSDGs未来都市29も、やっぱり変革をめざしていかなきゃいけない。ただ単に改革じゃない。だから家をリフォームするじゃなくて、ごろごろ土台から全部かえていかなきゃいけない、そういう時代になってきてますよという形ですね。

そのポスト2015年開発アジェンダのために、ここをなぜこれ出したかということ、SDGsができてくるまでにさまざまなステークホルダーの方たちが一緒に協力し合ってつくり上げてるといことなんです。ただ単に政府間だけで決めてるわけではなくて、そこにはさまざまなNGO、NPOがかかわります。女性も男性もかかわってくる。子どもたちもかかわる、若者もかかわりながら、SDGsの目標17とターゲットを決めてきてるといことなんです。ですので、やっぱりこのプロセスは堺市の中でも踏襲してほしいんです。いろんな方たちがこのSDGsを達成していくために、みんなで協力していくんだということを考えていかないと、ある人たちだけでやってたら全くみんなまた絵に描いた餅になっていってしまうということなんです。

2015年の9月、第70回国連総会で採択されたのがSDGsで、これ国連のビルです。プロジェクトンマッピングです。きれいですね。どうですか、ここも。プロジェクトンマッピングでSDGs、いかがですか、議長。いいですか。ぜひやっていただきたい。

採択されました。ここにも国連の政府間会議と同時に市民の会議も開かれておりました。これですね。これはもう皆さんのほうがよく御存じだと思いますけども、中心は持続可能な開発目標で、貧困のない持続可能な世界を次世代に受け継いでいくことをめざした世界規模の目標ですよ。もう繰り返します。次世代に向けてなんです。私たちだけじゃないんです。次世代へ向けた世界規模の目標です。そして2015年から2030年までに達成する国際目標としてされたわけですね。

これです。いっぱいあります。MDGsは8つだったんで、もう17ですから。17番目は、みんなで協力してやっていきましょうという話です。これです。誰ひとり取り残さない、リーブ・ノーワン・ビハインド、これが非常に有名なキャッチフレーズです。誰ひとり取り残さない。だから世界中のあらゆる形の貧困を終わらせることということで、じゃああらゆる貧困って何ですかっていうのは、ここにも書かれています。あらゆる貧困という経済的な貧困だけではない、文化的な貧困もそうだし、物を食べられないということもそうだし、ここに書かれてるので私重要だなと思うのは、発言できないということも貧困なんです。発言する場にも行けない。だから政策提言することもできないとか、これはこうだということと言えない、これも貧困だというふうに書かれています。貧困ってさまざまな貧困があるんですね。ですので、あらゆる形の貧困を終わらせるという形になります。

SDGsで世界を変える。SDGsの意味は何か、この3つですね。

まずは、多くの人々が共有できる17目標、これは多くの人々が共有できるというのは、先ほど申し上げましたように、さまざまな当事者、ステークホルダーがこのSDGsの目標17をつくるためにかかわったということです。物すごいエネルギーを使っています。やっぱりインターネットの時代だからできたと思ってます。いろんな意見出てきたのを集約して調整して、どうだあだということをしごくやってたわけですね。私のかかわってるNPOのメンバーもこの中に入ってやっておりました。

国連加盟国全てが合意した画期的な国際目標であるということなんです。通常、国連の加盟国は193だったかな、そのうちの例えば3つとか4つとか10個とか、うちはしませんよというの結構あるんですが、これに関してはもう共通目標だということで、全部が合意しています。そしてバックキャストリングです。バックキャストリングというのは、めざすべき未来像を設定しているということです。こうしたい。だから堺市の場合もそれはなってますよね。堺市さんの場合にも、未来都市29の間でもこうやりたい、こうなりたいという目標、理想像を掲げてます。この理想像を掲げないと、現状とどういうふうなギャップがあるのかが見えてきません。それに向かって何をすべきかということをやっていくので、バックキャ

スティング、今何をすべきかを考え動くということです。そのためにも、ああいう29の都市の、堺市さんも書かれている計画書というのは非常に重要になってきます。

進捗状況を把握するための指標の存在、これすごく重要なんです。数値目標を掲げやすく、積極的に取り組める機能を設けている。だから日本も2019年に、来年ですね、この数値目標を達成してるかどうかというのをやんなきゃいけないんです。堺市さんもやんなきゃいけない。ちゃんとやってるかどうか。だからこの3つというのは非常に重要になってきます。

SDGsの特徴は、先進国、途上国を問わず大きな課題となっている問題への取り組み、普遍性というふうに言われてますね、ユニバーサリティーという。MDGs、2000年のミレニアム開発目標は開発途上国の問題。しかし違うと。貧困は先進国にもあるし、まだまだ世界各国で共通して取り組まないものがいっぱいあるよねということで、SDGsができています。グローバル社会が抱える多種多様な課題が目配り、新しい焦点は格差、国際と国内。日本国内の格差にもちゃんと目を向けていきましょうよ。気候変動と持続可能な社会。ガバナンス、アカウンタビリティ、そして地球上の一人一人を大切にすることを保障する社会をつくるための応分の責任をそれぞれの組織や個人が果たす世界の到来をめざすことということで、日本ではそういうSDGsに積極的に取り組む都市29を選んで、これを達成していこうとしてるわけです。その29の取り組みがいろんなところに波及して、日本全国でSDGsに取り組んでいくということをめざしているわけです。

ちょっとMDGsというのと比べてみますと、開発目標のほうはどっちかという途上国、だけど開発と環境、つまりミレニアム開発目標のほうは開発目標だったんですけど、リオ+20のほうは環境だったんですね。これが開発と環境が融合したものがSDGsだというわけです。これです。MDGsから引き継がれた課題は、誰ひとり取り残さない、貧困、飢餓、教育、母子保健、ジェンダー。そして新たに出現した開発課題が、国家間・国内格差、平和で公正かつ包摂的な社会、地球と天然資源の永続的な保護、包摂的持続可能な経済成長、働きがいのある人間らしい仕事。

ここもちゃんと、こちらの、ちゃんと見させていただきました。SDGsの推進ですね、堺市さんのほうにもちゃんと書かれておりました。伝統的な開発問題とか、環境問題とか、先進国にも関連する大きな開発課題というガバナンスの問題というのが3つ入ってるのがSDGsの開発目標17だというふうに思ってください。だから今までそれぞれがぼんぼんぼんとなってたものが一緒になった。だからこそ世界共通語、国内・国際両方で問題ですよというふうに言われてます。この3つですね。

これは後でちょっとごらんいただきたいと思いますが、こういうふうな形で17選ばれています。特にこの目標17というのが持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化していくと。

ちょっと時間があれなのですけども、先ほど国家計画プロセスへの反映ということですよ

けども、採択文書でこのように書かれています。

なぜSDGs 29の都市なのかというと、SDGsとターゲットは一体のもので分割できない。地球規模で全ての国に対応が求められる。ただし、ここですね、各国の置かれた状況、能力、発展段階、政策や優先課題を踏まえることは必要である。ターゲットは高いレベルかつ地球規模で設定されており、各国政府はこれを念頭に各国の置かれた状況に応じて国レベルのターゲットを定める。各国政府は地球規模のターゲットを具体的な国家計画プロセスや政策、戦略に反映していくことが想定されているということから、日本も後で申し上げますSDGsに関して、国の動きの中で、この日本という国の状況に応じたものをつくっていくという形になります。

大事なのは、常に地球規模のターゲットなんです。地球規模のターゲット。狭いこの堺というだけじゃなくて、この堺から地球規模の課題を解決していくんだということを発信していくということですね。地元、ローカル、使い古された言葉ですけども、シンク・グローバリー・アクト・ローカリー、だけどシンク・ローカリー・アクト・グローバリーというので今グローバルなんていう言葉も出てますけども、そういうことを考えていきましょうというのがここに書かれています。

実はですね、日本では2015年の後、NPOなんかが中心になって、動く→動かすというNPOがあったんですが、ここが国会議員への働きかけとして議員勉強会を実施していました。相当頻繁にやってきました、このSDGsに関して。自民・公明・民主・社民・共産・維新等の、ちょっと今名前は変わってるところもございしますが、議員が呼びかけ人となり実施して、各党から8名が出席、このような状況ですね。研究者、外務省、NGO、NPO、企業の各セクターより発表がされて、SDGsは包括的な目標のため、各省庁を束ねる司令塔が必要との認識を共有、今後は国内NPOセクターとも協力しながら、SDGs議員連盟の設立に向けて働きかけていくというふうなことが2016年の3月の超党派の勉強会で実施された。

その後、国は例えばSDGsとG7のサミットがございました。このときは、やっぱりもう既にSDGsということがかなり意識をされておまして、そこにNPO、NGOの方たちもかかわっています。アジェンダ21の採択後、初となるサミットということもありまして、各国政府も相当SDGsを意識した発言があったというふうに聞いております。

で、日本の国内課題ということですけども、日本の国内課題とSDGs、普遍性。私たちはみんな途上国であるということです。私たち先進国じゃない。まだ途上国です。特にジェンダーに関しては途上国以下みたいな感じのことは言われてますが。日本国内の課題をSDGsの枠組みで捉えることで、国際的な文脈の中に日本の課題を置くということです。だから、シンク・グローバリー・アクト・ローカリーです。堺市もぜひここはとても重要なところなので、常に地球規模のところ、世界規模のところに対して自分たちがやってることがど

うつながっていくのかということとはチェックをしていただきたいというふうに思います。

29のいろんな各都市の計画を見させていただきましたが、ちょっとここが足りないかなというところが多いです。やっぱり自分たちのところのことは必死なんだけれども、それがどういうふうにつながっていくのかということなんですね。教育のところも。自分の地域の教育のことはあれだけ、でもそこから飛び立つ子どもたちが世界に飛び立ったときに、もしかしたら途上国の子どもの教育の支援にかかわるかもしれないとか、何かそういうバックキャストिंग的なものをもっと必要なのかなんていうふうに思います。

というのは、私がタンザニアのキリマンジャロというところに女子中学をある方たちとつくってしまったので、今、今度4年目なんですけども、それもそういう意味です。私たち日本の子どもたちは恵まれてるかもしれないけども、まだまだ世界的規模でいったら女子教育ができてないところもあるというようなところから、じゃあどうつながっていくか、どうやって応援、支援できるかということやってる活動です。

日本政府のSDGsの取り組み、ここから堺のこれが出てくるわけですね、未来都市、SDGs未来都市計画というのが公募をされたわけです。2017年の12月26日、SDGsアクションプラン2018が発表されます。SDGs未来都市選定発表されて、めでたく堺は選ばれたわけですね。この中に活用ガイドが公表されたりして、4年に1度の首脳レベル会合、これ実は来年です、を見据えて取り組み状況の確認と見直しを実施するために、こういう未来都市の選定というのもするんだという状況です。

SDGsアクションプラン2018、持続可能で強靱、これレジリエンスといいますよね。強靱という日本語になっちゃうと、ちょっと意味違うかなと思うんですけど、レジリエンス、柳のような、こうなるんだけどちゃんと戻るような雑草みたいなそういう強さっていう意味ですね、レジリエンス。そして誰ひとり取り残さない経済・社会・環境の統合。ここですね、経済・社会・環境。オイコスが環境も経済もあつたように、そして社会、社会環境も統合していくということですね。そして普遍性、包摂性、参画型、統合性、透明性と説明責任。2019年までをめでに最初フォローアップを実施しなきゃいけないという、もうせっぱ詰まっています。

SDGsの実施指針の8つの目標。これみんなもうネット上に出ていますので、ごらんください。きれいにぱっとあれが出てきます。パワーポイントの資料が公開されております。その中からちょっと抜粋してきました。

SDGsの実施指針の8つの分野、これ、日本国です。日本国内政府が出している8つの指針の中のトップがこれなんです。あらゆる人々の活躍の推進なんです。ここに女性の活躍推進が入ってきます。

健康・長寿の達成、成長市場の創出、なりわいということを書かれておりましたけれども、堺。地域活性、科学技術イノベーション、これがSociety 5.0です。持続可能で強

靱な国土と質の高いインフラの整備とかね、省エネとか書いてあるんですけども、この8番がSDGs実施推進の体制と手段。

さあ、なぜこのトップなのかということなんですよね。モデルの3つの柱がSDGsの担い手としての次世代と女性のエンパワーメント、Society 5.0、そしてまちづくりなんです。ここのところにちょっと焦点を絞っていきたいというふうに思います。

大丈夫ですか。行きます。

ジェンダー、このSDGsの目標5というのは、実は物すごく重要だというふうに言われてるんですが、いろんな29の都市の計画書を見ると、何かちょこっと目標が置かれてるんですが、実は世界的な動きの中でいうと、目標5は全てに通底すると言われてるんです。全てのところに。

女性のエンパワーメントとジェンダーの平等は、持続可能な開発を促進する上で欠かせません。女性と女兒に対するあらゆる形態の差別に終止符を打つことは、基本的人権であると同時に、他の全ての開発領域に対して波及効果がありますと国連でも言っているわけです。ですので、目標5はここに入りますという話じゃなくて、全部に入ってくる問題です。全部に入ってくる問題です、目標5。だから目標5は、しっかりともう1回よく読んでいただきたいと思います。

そのSDGsの担い手としての次世代、女性のエンパワーメントというところで、女性の活躍の推進、それから子どもの貧困対策、障害者の自立と社会参加支援、教育の充実、ここに全てジェンダー問題が入ってくると。

この女性活躍の推進なんですけども、意思決定、女性のエンパワーメント、これ政府が書いてるものですから、私が書いたものではございません。

あらゆる分野における女性の活躍を推進すべく、例えば以下の取り組みを実施する。これたしか30億円ぐらいの予算だったと思うんですけども、女性活躍情報の見える化の徹底・活用の促進、各種調達を通じたワーク・ライフ・バランスの推進、ここですね、政策・方針決定過程への女性の参画拡大、残念ながら今回の内閣も1人しかおりませんでした。その罪滅ぼしに副大臣5名ということですが、これってどうなのっていう感じです。それから、経済分野における女性リーダーの育成、組織トップの女性活躍へのコミットメント、男性の家事・育児への参画促進、これは1994年に高校の家庭科の男女共修をするということが女性差別撤廃条約を批准するための国内法の整備ということを考えてみると、まだまだできていない。地域における女性活躍の一層の加速。ここのところは、実は堺市は全国的にも非常に進んでる都市です。そこにいらっしゃる山口典子さんを初め、本当に全国的に見てもトップを走ってる状況ですので、ここのところをもっと押していくということは堺市の特徴をあらわしていくためにも重要ではないかなというふうに思います。

そしてここで、まちづくりのところでお話をさせていただきたいと思います。

今このSDGsというところからいうと、まちづくりというのは非常に重要になってくるんですが、そのまちづくりの中心となる人たちは一体誰なのか。これは消滅可能性都市というところとつながってまいります。

担い手としての次世代、女性のエンパワーメントと強靱で環境に優しい魅力的なまちづくりというところで、先進事例として豊島区を御紹介させていただきたいと思います。

豊島区は立教大学があるところなんですけど、2014年に消滅可能性都市が発表されました。増田さん、元岩手県知事。私が宮城県環境生活部の次長として浅野史郎さんに呼ばれて2年間、宮城県におりましたときに岩手県の知事でした。三重県の北川さんとか、鳥取の片山さんとかがよく宮城県に集っておられました、革新知事ということで。

そのとき、その方が消滅可能性都市、もう20代、30代の女性がいなくなりますよと、これをF1世代といいます。フォーミュラワンじゃないですけど、F1世代といまして、20代、30代の女性、ここの世代がもう今、がくっと減っているということと、それから豊島区の場合はその人たちが入ってこないということで、消滅可能性都市というふうに言われました。実は23区で唯一、消滅可能性都市と言われてしまいました。

それに対して危機意識を持ちました高野区長が、いわゆるそのF1の人たちの意見を自分たちは政策として反映してきたのかという反省をしたわけです。自分たちの政策決定過程のところに女性たちが入っているのかどうかということも反省をしたわけです。それで、彼女たちの意見を聞いていこうということでF1会議というのが設置されて、私はその座長になったわけです。

それをF1会議のメンバーを決めるために、まずは、としま100人女子会というのをやりました。住民の人たち、当事者の女性たちがどういうことを考えているのか、どういうまちにしていきたいのか、いわゆるバックキャスティングですね、どういうまちにしたいのかということを知ろうじゃないかということでやったのが、このとしまF1会議です。口の悪い人が年増の女を100人集めてどうするんだというふうに言われました。これはセクハラ的な発言なんですけど、それでいろんな最終的な提案のときに豊島区改め桜区というのが出たんですけど、議員さんのほうから、いやそれはちょっと議決できないという話で、豊島区のまんまです。

ちょっと皆さんに、このとしま100人女子会の様子をちょっと見ていただきたいと思います。

で、としまF1会議というので、ここから提案をいたしまして、11事業8,800万円というのが平成27年度の事業でお金がつきました。現在、消滅可能性都市と言われたときには13億円ぐらいだったんです。しかも女性という形ではなくて、待機児童問題に対する予算がこのF1会議を通して女性に優しいまちづくりということで、今50億円ぐらいになっています。その中で2016年に女性にやさしいまちづくり担当課というのをつくりまし

て、そこがいろんなさまざま吸い上げてきた意見を反映させていく、そして現在では「わたしらしく、暮らせるまち。」推進室というふうに変わりまして、F1会議のようなワールドカフェ、本当はきょうワールドカフェをやったらおもしろいんじゃないかなと思ったんですが、ワールドカフェをあちこちでやりながら意見を吸い上げながら、女性に優しいまちづくり、この女性に優しいまちづくりというものは結果として誰にとっても優しいまちづくりになるという、ユニバーサル、先ほどの普遍性だということを提言書に書きました。その結果こうなってるわけですね。

その結果、今いろんなことが行われていまして、としまF1会議がきっかけになりまして、住民参画型の政策形成に変わっている。もっと言うと、実はこれ、プロセスデザインをしていくときに議会というのをかなり意識しました。なぜならば、最終的な施策を決定するのは議員さんたちなんですね。議会だったので、このF1会議の会議をするときに、必ず議員さんにお声がけをいたしました。議員さんも一緒になって考えていきましょう。皆さんは住民の代表ですから一緒に考えましょう。

それから、行政の方にもメンバーになっていただきました。部課長さんも必ずオブザーバーで来ておられました。みんなでつくった協働でつくったF1会議の提案書ということになります。ですので、最終的に議会に提出する施策をつくってくださったのは行政の方ですので、その方たちも住民の意見を反映したものをつくっていただいて、最終的に8,800万円、11事業。

この議会の重要性を理解したメンバーのうち3人が議員さんになりました。2人、区議に立ちました。もう1人、都議に立ちました。3人当選いたしました。やはり地域を、まちをつくっていくといったときに、やっぱり議会というか、議員さんの役割というのは大きいんだということを彼女たちなりに理解をして、そしてそこから3人出て、そして議員さんを応援していくというか、私たちの考えを議員さんに伝えていって、そして政策に反映させていく。

それともう一つは、行政の人たちと連携・協働しながら、よりよいまちにしていく。議員さんも行政職員も私たちも、みんなこのまちを元気にしたいし、みんなが誰ひとり取り残されない、そういう貧困のないまちにしたいというそういう思いが、これに詰まってるかなというふうに思います。ですので、SDGsとは言わないまでも、もうそのSDGsが目標とするものを具現化してるかなというふうに思います。

豊島区は昨年、子育てしやすいまち、女性が働きやすい、住みやすいまち日本一に輝きました。消滅可能性都市と言われたところが危機意識を持ち、みんなで一緒にやっていくということから、汚名を返上して全国に発信するような地域になっているということで、ちょっと御紹介させていただきました。

最後に、あと10分ほどですけれども、日本の実施指針における地方自治体の役割という

ところを押さえておきたいというふうに思います。

これは、SDGsを全国的に実施するためには、広く全国の地方自治体及びその地域で活動するステークホルダーによる積極的な取り組みを推進することが不可欠であるというふうに書かれています。この観点から、各地方自治体に各種計画や戦略、方針の設定や改訂に当たっては、SDGsの要素を最大限反映してくださいと書いてあります。

いろんな計画とか戦略があると思います。それを最大限入れてくださいというふうに言っています、SDGs達成に向けた関係省庁の施策等も通じ、関係するステークホルダーとの連携の強化、SDGs達成に向けた取り組みを促進するということが地方自治体の役割として言われています。SDGsで日本を変える、世界を変える、自治体のSDGsへの取り組みとすると、ここですね、行政施策の範囲で実現可能かではなく、めざすべき理想の地域の姿を基盤にした地域目標を設定し、活動を展開するということで、まさに堺市さんがつくられている計画はそこにあると思います。

実現可能かではなくて、こうしていくんだということですね。それが理想を掲げるバックキャストिंगということです。

地域の目標を設定し、自治体の計画や政策に反映させていく。

SDGsというものがぽこっとあるわけじゃなくて、このSDGsの考え方を今既にある施策とか、これからつくろうとしているものに入れてくださいねという話です、きちっと。なので、SDGsは何をどういう内容を目標としているのか、ターゲットが160幾つもあるわけですから、それもしっかりと見た上で施策に反映するということが大事になってきます。

それから、SDGsの理解を深める、意識の向上に向けた啓発活動。環境基本計画とか、人権・貧困問題などの施策・計画などに反映していきましょう。持続可能な開発のための教育、ESDの推進、これも堺はやってます。

持続可能な公共調達慣行の促進ということで、これは持続可能な公共調達というのは、グリーン調達ですね。例えば、きょうも済みません、こんなにいっぱい資料つくってもらっちゃって、紙をいっぱい使っちゃったんですけど、とか、こういうペンとかそういったものは、ちゃんとグリーン購入になってるかどうか。ただ単にグリーンウォッシュになってないかとか、そういうことですね。ちゃんと環境のことを配慮してるか、いわゆるスマートシティになってるかですね。環境に配慮した都市になっているかということ。目標12の中のターゲットに書かれています。

SDGsは時代の流れの転換点、地方自治体の動きの加速、地方自治体は進捗状況の評価・確認する指標を活用して、自治体の取り組みが単発のキャンペーンで終わらないための仕組みづくりが必要です。単発のキャンペーンじゃないですよ、このSDGsはまさに持続させていくべき。

鍵は、活動の中心となるキーパーソンの存在です。首長さん、いかがでしょうか、大丈夫ですね、大丈夫、はいオーケーですね。議員さんです、大丈夫ですね。きょうもこれだけお忙しい中、熱心に来ていただいておりますので、もうばっちりですね、議員さん、それぞれの地域でこれを啓発していくという。そして職員の方、ばっちりですね。そしてNPOとかNGO、それから地域でいうと自治会、町内会とかそういったところが一緒になってやっていきます。だから、このキーパーソンの存在って非常に重要になってまいりますので、特にやっぱり議員さんの役割というのは大きいと思います。地域に戻られて、SDGs、SDGsって何じゃなんていうような話になるので、みんなが幸せになるということを考えるのよという形でいいと思います。そんなときに先ほどお配りしている私たちがめざす世界、子どものためのというのを使っていただくと、非常にわかりやすく書かれています。

自治体の取り組みとして、マルチステークホルダー・パートナーシップ、対話と協働の力でSDGsを達成していきましょうということですね。やっぱり2030年までに全ての国がこれらの目標を達成できるように助け合います。それぞれの国が国内の政策の中にグローバル目標を取り入れるように何らかの、どのように取り組むのか、考えます。グローバル目標に関連する分野の問題について取り組んできた組織や人と協力します。目標を達成するためには、こうした組織や人の経験や支援が必要ですよということなので、これ私がずっと歴史的な背景も申し上げてきました。こういう活動をしてるNPOはたくさんいます。老舗のNPOはいます。一生懸命やった自治体もたくさんあります。そういったところの先進事例も踏まえながら、またこのSDGsというのが未来世代ということ考えた活動なんだということをもみんなで共有しながら、この達成は自分たちの世代だけじゃなくて次の世代、世代間公正ということを考えてどうしてもやっていかなきゃいけないんだ。だけど、私は余りマストマストだと嫌になっちゃうので、ねばならないではなくてウィル、やりたいという形で、そこを達成するためのアクションにつなげてほしいなというふうなことを思っております。

最後、孫の写真です。この孫がちょっと先天性代謝異常で生まれましたけども、今5歳になりまして、大変元気になりました。私もやっぱりこのSDGsということ、あるいは環境の問題、ジェンダーの問題をやるときに、この子が大きくなったときにまた同じようなことを言わなきゃいけないというのはつらいです。自分の娘が生まれたときも、子どもとエコロジー、彼女を連れながら有機農業運動にかかわったりとか、消費者運動にかかわったりとか、環境教育とかやってまいりました。彼女は食が大事だということで東京農大に行って、今管理栄養士をしておりますが、そういう同じことを30年・20年後にまた言いたくないと思います。

ストロング事務局長が実はリオサミットの1992年のときに、実は1972年のときも事務局長だったんです。1992年に事務局長になったときに、20年前と同じことを自分が言わなきゃいけないことに対して自分は本当に憤ってるというふうにおっしゃってました。

だから、私たちもやっぱり20年・30年後に同じような研修をしなくてもいいように、やっぱり達成していきなというふうに思いますので、皆さんもぜひ頑張ってくださいなと。一緒にみんなそれこそ目標17、みんなで協力し合いながら、この目標を達成していくということで、ちょうどお時間となりましたので、終えたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

○山口議長 萩原先生、どうもありがとうございました。随分時間気にして急いでいただいたようにと思いますが、歯切れのいい御講演で、ありがとうございました。

それでは、皆さん、SDGs未来都市の堺市議会といたしまして、ただいまの先生の御講演内容について御質問とか、御意見とかございましたらどうぞ。挙手をお願いします。

○瀧上議員 瀧上と申します。きょうはどうもありがとうございました。

堺が設定しておりますSDGsのそれぞれの目標をもうごらんいただいて、評価いただいていると思うんですが、何か足りない点とか、こうしたらいいのになというようなアドバイスがあればいただきたいんですが、個人的に私が思いましたのは、SDGsがあろうがなかろうが、前々からつくってた施策がうまいことはまったなという感覚があって、それはよく言えば、堺がSDGsに沿ったようなことを今までやってきたというふうな捉え方もできますし、一方で、せっかくこういうSDGsという取り組みをするんだから、新たないろんなエッセンスを加えたりとか、いろんなこれまでの取り組みを加速させるような、そんなチャレンジな目標になればよかったのになという思いが少しあります。そうした点も踏まえて御意見ををお願いします。

○萩原講師 おっしゃるとおり、SDGsとか、そういう概念は突然やってくるわけですね。ですけれども、ちょっとお話ししてたように、もう既にいろんなところでSDGsの目標とかターゲット、そのための施策というのは展開されておられますので、印象はそれでいいと思います。

ただ、SDGsというものがしっかりと明文化されたことによって、もう1回それで見直していったときに、おっしゃるとおり、これは必要だとか、これはもうちょっとやっていったほうがいいとか、これはここと一緒にやっていったほうがいいという、縦じゃなくて横にしていくというための指標として重要ではないかなというふうに思います。

見させていただいて、先ほども話の中でもちょこちょこ言ったんですが、やっぱりローカルなところからどうグローバルというか、ここでの活動とか展開、成果、アウトカムをどうグローバルなところにつなげていくのかという視点がもうちょっと欲しいなと思ったんです。それができる都市だというふうに私は思っています。

一番最初に書いてあったように、港があって、いろんな文化を取り入れながら、しかし自分たちの文化もしっかりあると。そういうところの、これグローバルな話なので、ローカルの話に終わっているというのが実はほかの28もそうなんです。そういう視点がありました。

それから、教育のところをもうちょっとSDGsっぽく展開してほしいなというのが。つまり点数が高くなるとかそういう話ではなくて、例えば豊島区では、このF1会議を通して、子ども食堂をやったWAKUWAKUさんというところがあるんですけども、その方がメンバーに入ってくださって、子ども食堂の展開というのもこの中に書かれてますが、実はその先にも既に行ってるわけです。学習支援であるとか、それから外国にルーツを持つ子どもたちの支援であるとか、そこから何ができてきたかという、実は日本の子どもたちの識字率が高くないということがわかってきたんです。どういうことかという、アカデミックジャパニーズというんですけど、教科書が読めないとか、それこそ理解できないとか、そういう子どもたちが実は出てきているということなんですね。

ですから、学習支援をやっている中で、本当の意味での当事者がわかるような活動というか、だからこそ、そういう活動をしている方たちとの連携というのがすごく重要になってくるので、そのあたりも意識していただきたいなというふうには思いました。

教育という点でいうと、そういうここに書かれているものだけだと、ちょっと弱いかなど。そこからじゃあ先ほどちょっと申し上げたように、堺で学んだ人たちが世界に出ていってつながるような、そして文化を交流できるような、そういう力をつけた子どもたちがここから生まれていく、その子たちがまさにSDGsを達成していくというふうな、そういう描き方もあったらいいんじゃないかなというのをちょっと感じました。

あともう一つ、せっかくなので堺市は男女共同参画、熱心に取り組まれてきました。それから消費者教育も熱心に取り組まれてきました。目標12のところ、あるいは目標5というものが、ちょっと弱いかなどという感じがいたします。

目標12はすごく重要視されていますので、生産と消費の問題なので、生産者をかえていくという話ですね。

持続可能な開発って、やっぱり環境の問題が非常に大きいんです、実は。でも、そこがとっても見えにくくなってしまってるところがあるので、やっぱり環境に配慮したスマートシティとしての堺、これ今までも取り組んでこられたけれども、そこをもうちょっと見せていったらいいかなという気が、私はこれを読ませていただいたときに思いました。

○山口議長 ありがとうございます。

ほかにいかがですか。

○石本議員 石本と申します。本当に素晴らしいお話ありがとうございました。

先生の論文に文を寄せられたという原ひろ子先生、私の憧れの人なんです、実は。カナダインディアンの現地に単身で調査をされたというその本を昔からずっと読み続けているんですけど、そこで私は1つ気がついたことは、原先生そのときにカナダ大学のいろんな財団とかそういうところから資金を寄せられて、そしてそれを使って、非常に御自身も努力はされてるんですけど、素晴らしい研究をされているんですね。私、この人ひょっとしたらこ

こで住みはるん違うかなとずっと思ってたんですけど、きょうのお話聞いて、ちゃんと大学で自分の得たものを次の人にお伝えされてるんだなということを知って、大変安心というか、がっかりではないんですけど、安心いたしました。

そこで、実は先日ノーベル生理学・医学賞ですかね、本庶先生が受けられたんですけど、そのときにも基礎研究にもっと力を入れなければならないというふうにおっしゃってますね。それで、ちょうど私ここへ来る前に見た日刊現代の新聞記事で、政府の負担割合、それが載ってたんです。フランスでは約34%、日本は15%しかないんですね、半額なんですね。それと同じようなことが大学だけじゃなくて小学校、中学校、いわゆる義務教育にも言えると思うんですね。

堺市では、私はこれは全国的にも非常に胸張って言いたいと思うのは、38人学級を小学校3年生から6年生までに実施したんですね。これは本当によかったと。私も実は元小学校教師なので、悲願だったんですよ。そういうところでは、本当になぜ、全国的にも小さな自治体では、そういう少人数学級やってるんですけど、国は全然動かない。子どもの医療助成もやっぱりそうなんですね。堺ではワンコインで、小学校、中学校卒業するまで、生まれてから中学校卒業するまでそういう医療助成してて、それを来年4月からは高校生までに拡大するとそういうことをやってるんですけど、これも国は全然動かないという感じがするんですね。

そのあたりのことでどのようにお考えか、あるいはその理由とかも、ここじゃないかというようなことがあれば、ちょっと教えていただきたいと思うんです。以上です。

○萩原なつ子講師 ありがとうございます。まず、原ひろ子さん、ひろ子ちゃんとかって私、呼んでるんですけど、原ひろ子先生の考え方はしっかりと受け継ぎ、そして次にもつなげていきたいと思います。どうもありがとうございます。

基礎研究に関してですけども、今大学の置かれている状況が非常に大変です。2020年でしたっけ、東京オリンピック・パラリンピックが開かれるために、ボランティア活動をするので授業を何とかせえというふうに言われておりますが、もともとそういった学生たちの自由な活動をできなくしたのは、文部科学省の15週という縛りなんですね。15週やるって大変で、4月1日からスタートして8月の第1週までやっています。ですから、夏休みもだんだんなくなってくる。そうすると、本当に自由に何かをするということができなくなるとというのが、そういう縛り。それを考えてる人が現場の人じゃないということですね。ここがすごく大事なところだと思います。

もう一つは、研究費に関してですけども、科学研究費というのがございますが、これもふえておりません。もらえる人数は限られております。そしてまさに今、KPIって書いてありますよね、いろんなところに。ここにも書いてありますよね。都市のほうの計画のところにもKPIって書いてあって、これ要するにアウトプット・アウトカムの話なんですね。

これをやったらどうなるか。

今、私たちはアウトカムにすごく縛られてます。アウトプットというのは、こういうふう
にやって何人集まりました、こんなふうになりましたでいいんですが、そこからどういう成
果があったのかということをもとに物すごく求められます。これは行政評価も一緒だと思います。
議員さんたちの評価もそうだと思います。

目に見える成果だけを取り上げようとする、基礎研究へはお金行きません。応用のとこ
ろばかりに行きます。一番大事なのは基礎研究なんです。特に社会科学というのは、すぐ
には成果は見えないので、地道な調査が必要なんですけど、そういったところにはお金は
行きません。

もっと言うと、教員がめちゃくちゃ忙し過ぎて、調査に実は行けないんです。まず休講で
きません。皆さん、休講ありましたよね。今、休講したら必ず補講しなきゃいけないので、
休講できません。実は来週でしたっけ、再来週でしたっけ、カナダに行くんですけども、休
講と会議が入ってるんで、休講に関してはちゃんと補講することになります。そうすると、
大事な研究したいといっても休講するとまずいって言う、それはまずいはずなんですけど
も、全部を休講するわけではないので、行ったことが学生にとってもプラスにはなると思
うんですが、なかなかそういう昔のような緩やかさは全くありません。研究費は自分でとって
こいということになりますので、おいおい例えばお医者さんでいうと、どうしても製薬会社
とつながっていったりとかする。お金のとれる人は研究が進むけども、やっぱりお金のとれ
ない分野というのがあります。お金のとれない分野のほうが実は多いんです。

このSDGsをやってくるときも、実は対価が支払われないような活動をしているNPOが
非常に重要な役割を果たしています。環境にもすぐに成果があらわれるものはありませんの
で、やっぱりアウトカムだけを求めてしまうような評価のあり方というのを私は変えていか
なきゃいけないというふうに思います。これは子どもに対してもそうだと思います。10
年・20年後に花開くでいいんじゃないですか。なぜすぐの成果を求めるのか。

だから、やっぱり評価は大事なんですけども、評価の仕方、KPIというのは私は余り好
きではないなんですけども、アウトカム、アウトカムばかりを求めるところに対して問題点
がある。なので、そこでアウトカムがちゃんと成果があらわれた人のところにお金を上げま
すよということになると、出にくいところは出なくなりますので、おいおい基礎研究はしぼ
んでいくということになります。

私は大学の教員に真っすぐになったわけじゃなくて、ある時期4年ほど東京大学の動物学
教室の学部長秘書をしたことがあります。ここは基礎研究の宝庫です。それこそ、がんは
どのように発生するのかという発生生物学だったりとか、どうしてこうなるのか、移植して
どうなるかってそういうとこでした。

あるときに私、先生に聞いたんです。この研究はどういう成果が見えるんですかって聞い

たら、あっはっはっはっはってその先生は笑われて、100年後に出ますかねとおっしゃったんです。100年後ですか。もう1人、ネズミの尻尾に毛が3本というオバQのような研究してた学生がいたんです。その人にも、尻尾に毛が3本の研究って何になるんですかって言ったら、僕にもわからないけど、なぜそうなのかがとっても気になって。今その彼は基礎生物研というのがあるんですけど、すごく重要な研究してます。あと、メダカの研究してた人たちは、そこをロケットに飛ばすための研究やってたりとか。だから一見私たち一般ピープルからすると、これはどういうものに成果があるんだということがたくさんあるんですが、それが今回の本庶さんの受賞とかにつながっていくわけで、山中さんのiPS細胞とか、そういう研究者を見てると、成果というのは長期的な視点で見ていかなきゃいけないんだな、これは議員さんの活動も一緒だと思います。これやったからすぐ、ということではないですよ。だから、それは消費者側もそこをちゃんと考えなきゃいけないくて、すぐ目に見えるような成果ばかりを求めると、先ほどおっしゃられたような日本から基礎研究というのがなくなって、そこにお金を投じようという考えの人たちが財政の方たちにいなくなってしまうという危険性はあるのではないかなというふうに思います。

あと、子どものほうの38人学級なんですけども、私4年間、フィンランドの教育調べたことがあるんです。あれは教科ごとに人数が変わるんですよ、子どもの。

例えば哲学をやるときには結構少ない人数になるんです。みんなで議論するんですよ。議論というよりも対話を通して、いろんな考え方があるというのをお互いに共有したりとか。例えば数学とかそういうののときには、アシスタントがちゃんをつくようになってる。

もっと驚いたのは、私こういうことを言われてしまったんです。日本のお母さん、お父さんは心配じゃないんですかって。何ですかと。大学を出たばかりの社会人経験のない人に子どもをよく預けられますねって言われたんです。これちょっとショックでした。考えてみたら、そうですねと。22歳で出た人が教員になっていく。インターンシップも教育実習2週間ぐらいですか、ですよ。私は預けられませんと言われたんです、その先生に。ええって思っ。

フィンランドはどうなってるかという、全部大学院卒です。院卒だからいいという話ではなくて、その1年、2年ぐらいちゃんとメンターがついてインターンやるわけですよ、実際に。それからもう一つは、文部科学省的なものがないので、検定図書というのはありませんが、ネット上にいっぱいいろんな情報が出ていて、自分で教科書をつくっていくことをやるわけですね。そのときに1人でもちろんつくるわけではなくて、いろんな人の協力の中でつくって行って、この子にはこうしていくという寄り添い型の教育をしていくわけですね。あそこは資源のない国ですので、もう知識なんですよ、知識とアイデアなんです、資源のない国なので。だから、そういう教育をやっぱり徹底してされている。

それからもう一つは、外国にルーツを持つ子どもたちも結構多いので、まず英語はもちろ

んです。それからフィンランド語、それからスウェーデンに征服されていたので、スウェーデン語もできます。そしてもう一つ大事にしてるのが母語なんです。外国から来られてる方たち、例えば日本から行ったとすると、日本語をしっかりと子どもたちに教えていきたいと思います、という、ダブルリミテッドをつくらないという。どっちにもならないということではなくて、その子の将来のことを考えたときに、言葉というのは非常に重要なので、しっかりと母語を教えましょうという教育もされてました。

なので、やっぱり日本も英語の教育が始まってきますけれども、それはやっぱりこのSDGsなんかを見ていったときにグローバル化社会の中で絶対必要なんですが、同時にしっかりと母語も両方やっていくという政策、この大切さみたいなものを、そのフィンランドでも教えていただきました。

なので、38人、少ないというのはもちろんそうなんですが、教科ごとに何かかえていけるような、そういう新しい教育のあり方というんですか、その形もSDGsをきっかけにして、堺から何か発信していったらおもしろいんじゃないかなということを思います。外国にルーツを持つ子どもたちの話がちょっとこの中には入ってなかったもので、そのあたりの視点も入れながら、もう一つ今のこの堺に住んでる子どもたちがどうグローバル化していくのか。そのグローバルというのは、きちっと地元のことあるいは日本のことをしっかり学びつつ、基礎を持ちつつ、そして世界に目を向けていくということにつながるためのSDGsになっていけたらいいかなというふうに思っております。

お答えになったかどうかわかりませんが。

○山口議長 ありがとうございます。

それではそろそろ、また個別に御質問があるようでしたら、私どものほうにお伝えいただけましたら先生にお尋ねしておくということでよろしいでしょうか。

それでは、萩原先生、長時間にわたってありがとうございました。皆さん、大きな拍手をお願いします。（拍手）

○芝田副議長 それでは、閉会に当たり一言御礼を申し上げます。

萩原なつ子様におかれましては、長時間貴重な御講演をいただきまして、まことにありがとうございました。

我々議員一同、本日拝聴させていただきました御講演の内容を深く心にとどめ、これを十分に生かし、今後の議会活動に役立てて務めてまいる所存でございます。

また、御出席の議員各位におかれましては、最後まで御聴講いただきましたことを厚く御礼を申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○山口議長 それでは、これもちまして議員研修会を閉会させていただきます。どうもありがとうございました。

○午前11時49分閉会